

者錯倒胴回

— PACHISLO FREAK —

面接

パチンコ・スロット店は過去に記載したように、従業員の出入りがとても激しい職場である。今まで幾多の面接を行ってきた店長さえ、その人物が使える者なのか、長続きする者なのか、到底予想ができないものだ。と私に語っていたことがある。結果、店長の出す答えは「ほぼ採用」であった。

確かに、その数打てば当たる作戦も有用な方法である。しかし、従業員の身にもなつてもらいたい。新人が入ってくるたびに、仕事の説明である。ホールの流れはもちろん、ホール以外のルールの説明や、シフトの相談など、新人が多ければ多いほどその仕事は増え、また、すぐに辞めていく者が多ければ多いほど、その指導や説明は適当になつてゆく。さらには雇い主である店長さえも、どうせ辞めていくんだろ？というような態度をあからさまに出す。その負の連鎖が数週間続いたとき、店長が私にこう口を開いた。

「どうも俺が面接するとすぐに辞めてしまふ、これからお前が面接やれ。今日もそろそろ希望者がくるから、今日からやつてくれ。」

「今日からですか？私は面接など今まで一度もしたことがありません、今日だけは店長にお任せできませんか？」

「そんなの適当でいいんだよ。とはいっても、お前は固いからな、今日だけは俺がするよ。」

いつも面接時は面接者が緊張しないように事務所を離れていた私だったが、今日は面接がどんな様子なのかを偵察するため、事務所に留まることにした。暫くすると、インカムに「入社希望の方が面接にできました」と入ってくる。事務所まで連れてくるように伝え、事務所に入ると、さつそく面接の開始だった。

入社希望のその青年は「失礼します、面接をお願いします」と丁寧に挨拶すると、店長に促されそこに用意されていた椅子に座った。

「履歴書は？」

「あ、はい、こちらになります。」

その青年は慌ててカバンからそれを取り出し、店長に手渡した。まじまじとそれを見ている店長、そのときの無言の空間がやけに居心地が悪い。その青年は緊張した面持ちで、店長の手元をじつと見つめていた。

店長が履歴欄を指差して言う、

「この△社ってなんの会社？」

「それは派遣会社です。」

「ふーん、その前は○○にいたんだ、○

○は大手のパチンコ屋さんなのに何で辞めたの？」

「上司との折り合いが合わず、数人で同時に辞めてやりました。」

「ひやはは！嫌なヤツだったんだ。でもね、上司ってのはどこでもそんなもんだよ。そこに立つてるヤツがうちの副主任なんだけど、コイツも嫌なヤツだよ。ひやはは！」

店長は私を指差して、例の甲高い笑い

声を上げる。その青年も振り返り、私のほうを見る。苦笑いする私に対し、その視線は意外にも妙に冷たい。困惑した表情だと予想していたので、その意外性に一瞬、固まってしまった。よほどその上司がくせ者だったのだろうか？いや、そんな風には感じない、「この青年がクセモノ」とどちらかと言えばこちらが正解だろう、なぜか私はそのように直感できた。

その後、店長とその青年とのたわいない会話が延々と続き、最後の給料形態や勤務時間の説明を除くと、その会話内に面接らしいところは一つもなかった。

「じゃ、明日から来て。早番ね。コイツがいると思うから分かんことは適当に聞いて。」

「はい、では明日からよろしくお願いします。」

青年はそう挨拶し、そそくさと事務所を出て行った。

「面接というより、日常的な会話でしたね。」

「バカだなあ、日常的な会話は構えないから割と本当のことをしゃべっちゃうもんなんだよ。そこから相手がどういうヤツか探るんだよ。」

「はあ、なるほど……」

この店長の言葉が真意かどうか分かんないが、少なくとも私には「ただの暇つぶし」にしか見えなかった。なぜならそれは、店長は、ほぼ100%採用するからである。

面接2

あくる日は、昨日メモ帳に書いたものを、熱心に読み返していた。必ず聞かなければいけない内容をまとめた「面接対応メモ」である。その理由は、今日さつそく面接があるからである。それを繰り返して読んでみると、昨日面接だった青年が出動してきた。

「おはようございます。」

「おはよう、U君だったね。事務員と班長がまだだから、彼らが来るまで休憩室でくつろいでいて。」

そういうと休憩室に案内し、私は事務所に戻った。間もなく他の従業員も続々と出勤してきて、間もなくすると皆が揃った。いつもより早めの朝礼を行い、新人U君を紹介した。

「今日から働いてもらうU君です、経

験者なのである程度できると思います。が、ホールによって違うところも多いので、みんな教えてあげてください。事務員さん、あとで人社の書類関係をお願いします。班長、ホール内のことよろしく。」

すべての面倒な作業を班長と事務員に押し付け、私は面接に備えた。

「副主任、面接の方が見えましたのでお願いします。」インカムにそう入ってきたのは、面接の約束時間である10時ちょうど。さつそく事務所に入ってもらい、面接の開始である。

履歴書を一通り確認し、さつそく質問に入る。私のする質問に対し的確に答え、分からないことは分からないとはつきり言う。名前はH。面接開始から2、3分で、私の気持ちは採用が決まっていたが、店長の真似をして世間話を長々としていた。

「では、明日から来て。とりあえず早番ね。」

「はい、ありがとうございます！」

ここ2日でもとても使えるような2人が入ったものだ。まだなんとも言えないが、私などすぐに追い越していきそうな勢いも感じる。K班長の刺激にもなるだろう。

この2人の入社を機に、この後、当店の全盛期を迎えることとなる。当ホールの活気に貢献した2人、しかしさらにその後には重大な事件の元凶でもある2人組みであった。

抜き打ちチェック

6月20日(土)、仕事の合間にスロットをしてきました。せっかくだからゲッツイイベントに行こうと思い、「イペカレ」にて調べると、カクテル伊勢店がマンスリーチャンピオンシップを開催しているのを見。さつそく同店に向かう。

店内に入ると数機種にゲッツイが刺さっていた。とりあえずイベント対象機種のバイオに着席。6千円でレギュラーボーナスをゲットし、その後5ゲームでビッグボーナス。さらに右側の怖い顔の人が光り、バイオハザード突入。そのARTにハズレが2回出て、高設定の雰囲気。結局ART6連チャンして、その間にビッグ2回とレギュラー2回。しかしその後700ハマリで200枚位を持って台移動。

打てる時間も少ないので旧エヴァに着席。持ち玉でレギュラーに当選し、その後のレイチャンスでハズレ2回。今度も高設定の雰囲気はあったがメダル切れ。追加投資をしていた5千円目、チェリーハズレからの赤7ビッグに当選。通常時のコイン持ちからしても、その後5回当選したレイチャンスのハズレ確率にしても、赤7がほとんどだったことから、ほぼ設定5で間違いないさそう。結局時間切れで900枚弱獲得。プラス3000円にて終了となった。そうそう、レアな演出が出たのでちょっと報告、ビッグ終了後の1ゲーム目、何気なくボンボンボンとリールを止めると液晶が効果音と共に真つ暗に。リール上には左下段赤7、中リール中段赤7、のリーチ目が一次にレバーを叩くと、なにやら見たことのない演

出が始まったが、帰る時間が押し迫っていたこともあり、即座に揃えてしまった。ビッグを消化中に、「そついでば1ゲーム連チャン限定演出がある」と聞いたことがあるぞ」と思い出し、なにかとつと悔しかったです。

6枚交換ということもあるでしょうが、ほんとによく出ました。新エヴァにもあからさまな6がありました。たよ。ゲッツイイベントだからなのか、カクテル伊勢店さんだからなのかは分かりませんが、その出玉は十分すぎる合格点。一度来店して高設定を実感していただきたいと思っています。

これからいろんなホールに訪れて、抜き打ちチェックをしたいと思っています。この紙面で痛いことを書かれないように気合を入れて頑張ってください！ちなみに、この20日という日は、この原稿の締め切り日なので、20日あたりは抜き打ち危険度がとても高いです(笑)

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。



パチスロ「バイオハザード」

(山佐/2008年7月)
上乗せ可能なARTの連チャンが4号機を彷彿とさせる5号機屈指の爆裂機。